

通俗語源説にみるジャイナの修行者像

山 崎 守 一

プラークリット作品においても、サンスクリット作品やパーリ作品と同様に、興味深い語源解釈がしばしばみられる。このような解釈は、多くの場合、その語の発音に近い音をもつ語根や名詞・形容詞等から導き出され、通俗語源説と呼ばれるものである¹⁾。この通俗語源説は言語学的研究の視点から見れば必ずしも正しいとは言えず、ある意図のもとに人々によって語り伝えられ、受け継がれてきた伝統的解釈ということができる。

このような通俗語源解釈はプラークリット作品の中で数多くみられ、地名や個人名の語源の説明に多く用いられているが、それら地名や個人名にはどのような起源や謂われがあるかを詳しく説明する説話の中で語られることもある²⁾。この現象は古代インドの修行者の呼称においても例外ではない。本稿では修行者の代表的な呼称である *samaṇa* と *māhaṇa* をとりあげ、それらの通俗語源解釈を示し、ジャイナ教徒がこれら修行者にどのような人物像を抱いていたかを検討することを目的とする。

Sūyagadaṅga 1. 16 に次のような一節がある。まず世尊が、「このように（五感を）制御し、自制し、身体を捨てる人が、1. パラモン 2. 沙門 3. 比丘 4. ニガンタとよばれる」と告げる。すると弟子たちは「世尊よ、制御し、自制し、捨身した人が、何故にパラモン、沙門、比丘、ニガンタといわれるのですか。大牟尼よ、私たちに話して下さい」と尋ねる。

Śīlāṅka の註釈³⁾ をみると、「すべての生きものを殺さない人、彼がパラモンである」と解している。つまり、*māhaṇa* < *mā* + *han-* と通俗語源解釈をしているのである。また、「殺害しないことが梵行 (*brahmacarya*) であり、それに専念するのがパラモンである」と説く。そして *samaṇa* については「苦行を行ずる (*śrāmyati*) 人が *śramaṇa* である」と正しい語源解釈を示しつつも、*sama* を平等、*manas* を内器官（心蔵）に解し、平等な心をもつ人 (*samaṇa*) はどこにおいても、白檀と斧（についてのことわざ）のように⁴⁾、包容力があるべきであることを述べている。

しかしながら、直後の散文で述べられる世尊によるパラモンと沙門の定義は直

接この通俗語源説を述べているわけではない。まず, samaṇa についての通俗語源説がはっきり認められる箇所は独立経典である Aṇuogadāra である。

jaha mama ṇa piṇṇ dukkhaṇ jāpiya emeva savvajīvāṇaṇ
na haṇai na haṇāveī ya samamaṇāī teṇa so samaṇo (Aṇu. g. 129)⁵⁾

私にとって(殺害, 死等は)苦であって, 好ましくないように, すべての生きものにとってもそのようであると知って, 殺しもしないし, 殺させもしない。それ故,(すべての生きものに)等しく振舞う人, 彼は沙門である。

註釈⁶⁾に従って訳したものであるが, この詩頌では samaṇa という語を sama「等しい」という形容詞から解釈して, samamaṇati tti sarvajīveṣu tulyaṇ varttate yatas tenāsau samaṇo とみている。沙門の条件として, すべての生きものに公平(平等)であるべきことは, ジャイナの初期の聖典において重きが置かれている⁷⁾。

引き続き Aṇu. g. 130 をみてみよう。

ṇatthi ya se koi veso pio va savvesu ceva jīvesu
eeṇa hoi samaṇo eso anno vi pajjāo (Aṇu. g. 130)

どこにおいても, すべての生きものに(平等な心をもつがゆえに)彼には嫌悪や好意はない。それ故に彼は沙門である。それはまた聖者の別名である。

この註釈は samaṇa を sama と manas から導き出すという通俗語源解釈をしているのである。

so samaṇo jai sumaṇo bhāveṇa ya jai ṇa hoi pāvamaṇo
sayāṇe ya jane ya samo samo ya mānā 'vamāṇesu (Aṇu. g. 132)

もしかの沙門がよい心をもつなら, そしてもし彼が欲望によって悪い心をもたないなら, 親族においても人々においても平等である。慢心と悔蔑にも平等である。

この詩頌も samaṇa を sa-manas と sama という通俗語源から導き出していることがわかる。

次に, ヴェーダ聖典を受持し, 司祭者であったバラモンはジャイナ教においてどのように捉えられていったのであろうか。換言するなら, バラモンの概念はジャイナ教においてどのように変遷していったのであろうか。S. B. Deo⁸⁾の言葉を借りるまでもなく, 形骸化した祭祀をとり行ない, 墮落したバラモン僧を指しているのではないことは明白である。ジャイナ教徒は好んで Tirthankara を māhana と呼び, mā + han- と通俗語源解釈をしている。

Uttarajjhāyā の第 25 章は真の祭祀とは何かを説く章である。

na vi muṇḍieṇa samaṇo na oṃkāseṇa bambhaṇo

na muṇi raṇṇa vāseṇaṃ kusa-cīreṇa tāvaso (Utt. 25. 31)

剃髪によって沙門ではない。聖音 om を唱えることによってバラモンではない。森で生活することによって牟尼ではない。クシャ草から作られた服を着ることによって苦行者ではない。

この詩頌から、出家修行者の外面的な姿を伺い知ることができるが、次の詩頌によって内面的な真の修行者像が浮かびあがる。

samayāe samaṇo hoi bambhaceraṃ bambhaṇo

nāṇeṇa u muṇi hoi taveṇa hoi tāvaso (Utt. 25. 32)

平等によって沙門であり、梵行によってバラモンである。知識によって牟尼であり苦行によって苦行者である。

バラモンは文字通り梵行によってバラモンと呼ばれるのであるが、この bambhacera とは具体的に何を指すのであろうか。それは vv. 19-29 と v. 34 において taṃ vayaṃ būma māhaṇaṃ の定形句で終わる詩頌で述べられる。これらの詩頌の内容は凡そ五誓戒の範疇に分類されるものである。そして v. 30:

pasu-bandhā savva-veyā ya jaṭṭhaṃ ca pāva-kammaṇā

na taṃ tāyanti dussīlaṃ kammāṇi balavanti hi (Utt. 25. 30)

家畜を縛りつけること、すべてのヴェーダ、そして祭祀は悪い業の故に罪人を守らない。なぜなら彼の業は強力であるから。

この詩頌はヴェーダを学ぶことや家畜を生け贄とするような祭祀は極めて罪深い行為であり、真のバラモンのなすべき行為ではないことを教えている。ここで示されるように、バラモンはいかなる生きものにも危害を加えない、すなわち māhaṇa (<mā+han-) なのである。Utt. 25. 23 はさらにこのことを強調する。

tasapāṇe viyāṇettā saṃgaheṇa ya thāvare

jo na hiṃsai tivihēṇa taṃ vayaṃ būma māhaṇaṃṃ.

動こうが動くまいが、生きものを完全に理解して、三つ（身・口・意）の方法で彼らを傷つけない人、彼を私たちはバラモンとよぶ。

このように、samaṇa は sama あるいは sa-manas から導かれ、māhaṇa は mā+han- から解釈しているのである⁹⁾。元来、samaṇa は Skt śramaṇa から、māhaṇa は Skt brāhmaṇa から派生したものである。Ardhamāgadhī においては māhaṇa の他に bambhaṇa (cf Utt. 25. 32) の形もみられる。恐らく māhaṇa は bambhaṇa の一つの方言であろう。正しい発展過程は次のようになる。brāhmaṇa > bamhaṇa (Śaurasenī 語) > bambhaṇa > *bāhaṇa > māhaṇa。¹⁰⁾ したがって brā-

hmaṇa と māhaṇa とは語源的に何の連絡性ももち得ない。インド・ヨーロッパ語における現代の科学的な語源学研究の水準からみれば、もはや採用され得ないけれども、プラークリットにみられる通俗語源解釈は、古代インド人がその語に具体的な概念を十分に包含しようとした工夫であるといえよう。

この通俗語源解釈によって奇しくも samaṇa と māhaṇa は同一の概念に含まれることに気づくのである。すべての生きものに平等に接し、傷つけてはならないというのは、Āyāraṅga 1. 5. 5. 411) で説かれるように、殺害しようとしているものが自分自身であるから、どのような生きものをも殺害してはならないということになる。Āyāraṅga の第一篇で終始貫かれていた思想は、どんな生きものにも危害や殺害を加えるべきではないという禁戒である。

五大誓戒の第一の項目である不殺生戒を samaṇa と māhaṇa の通俗語源解釈を通して教示しているのである。ここにジャイナの修行者像の一端を垣間見ることができる。

- 1) 通俗語源説の研究に、原実教授、'A note on the Epic Folk-etymology of rājan', *Journal of the Ganganath Jha Research Institute*, vol. XXV, pp. 489-99; B. R. Saksena, 'Fanciful Etymologies in the Dhammapada', *Poona Oriental Series*, No. 39, pp. 315-18 等がある。2) 例えば pratyekabuddha となる四人の王、すなわち Karakaṇḍu, Dummuhā, Nami, Naggai の名前の謂われが語られる物語がある。H. Jacobi, *Ausgewählte Erzählungen in Māhārāṣṭri*, Leipzig 1886, pp. 34-55. 3) *Lālā Sundarlāl Jain Āgama-granthamālā* Vol. I, p. 175 f. 4) vāsicandanakalpa については拙稿「Uttarajjhāyā 研究 VII」『中央学術研究所紀要』No. 13, p. 45 参照。5) *Jaina-Āgama-Series* No. 1 によって詩頌の番号を付した。6) *Abhidhāna Rājendra Koṣa*, s. v. samaṇa. 7) cf. nimmamo nirahaṃkāro nisaṃgo cattaḡāraṇavo/ samo ya savva-bhūesu tasesu thāvaresu ya// (Utt. 19. 89). 8) S. B. Deo, *History of Jaina Monachism*, Poona 1956, p. 48. 9) これに対してパーリ聖典では samaṇa を sam- (<śam-) 「止む」から導き、sameti, samitatta (Dhp. 265), samacariyā (Dhp. 388), samitāvi (Sn. 520) に結びつけ、それぞれ通俗語源的説明をしている。また、パーリにおけるバラモンは brāhmaṇa であり、mā + han- からは導き出すことができない。brāhmaṇa に関してパーリの通俗語源は bahi と結びつけられ bāhita-pāpa = brāhmaṇa (Dhp. 388), bāhetvā sabbapāpakāni = brahmā (Sn. 519) ということになる。10) -b->-m- の例として kabandha > kamandha (Pischel § 250), paribandh->parimanth (K. R. Norman, 'Middle Indo-Aryan Studies V', *JOIB* vol. XV, p. 116) 等がある。11) tumāṃ si nāma taṃ c'eva jaṃ 'hantavvaṃ' ti mannasi! tumāṃ si nāma taṃ c'eva jaṃ 'ajjāveyavvaṃ' ti mannasi,pariyāveyavvaṃ' 'parigheṭṭavvaṃ' 'uddaveyavvaṃ' añjū c'eyāṃ-paḍibuddhā-jīvi tamhā na hantā na vi ghāyae. (仙台電波高専講師)